

「居場所」概念と日本文化の関連について

中藤 信哉

1. はじめに

「居場所」については、心理学を初めとして教育や社会学など様々な分野において研究がなされるようになってきている。もともとは「人が居るところ」という、いわば物理的にその人が存在している場所について記述する言葉だった「居場所」という言葉は、近年、「安心できるところ」や、「自分らしく居られるところ」といった心理的次元の意味合いが含まれ、使用されるようになってきている。心理臨床の実践においても、ときにクライアントから「居場所がない」という言葉が語られるが、このときの「居場所」という語が、クライアントの物理的な次元での居場所ではなく、むしろ心理的な次元の事柄を表現していることは明白である。こうして「居場所」という言葉は、心理学的にも一つの概念となっている。しかし、「居場所」については、特に1990年代以降様々な研究がなされ、その中である程度の共通性を見出されているものの、未だにその定義が確立されているとは言い難い。

「居場所」については、それと同様の概念が海外にはないという指摘がある。杉本・庄司(2006)は“日本で現在使用されているような、心理的側面を含めた意味での「居場所」は、言葉の概念自体がないために、研究は行われていない”と述べている。また則定(2008)も同様に、“「居場所」という言葉は、「place」「room」「whereabouts」といった語に訳されるが、これは身の置き所を指し示すもので、これ自体には心理的要素を含んでいない”と述べている。もちろん、海外に、このような「安心できるところ」や「自分らしく居られる」といった意味の言葉がないわけではない。例えば英語においては home という言葉が、「心の安らぐ場所」といった意味合いで用いられることがある。“～～is my home. I can be myself here.”といった表現は日常的に見受けられる。このとき、この home の意味は、居場所の意味と重なるところがあると考えられる。しかし、home の基本的な意味が家族との生活が営まれる場としての家庭や、自分の生活の基本となる家であることを考慮すれば、「心の安らぐ場」といった意味合いが含まれることは了解できるので、対して、「居場所」という言葉には、もともと必ずしも共にいる他者の存在が想定されているとは言い難く、また、必ずしも自分の居住する空間に限定されるわけでもない。こうした「居場所」という言葉に、「安心できるところ」や「自分らしく居られるところ」といった心理的な意味合いが含まれるようになった点において、海外において“心理的側面を含めた意味での「居場所」は、言葉の概念自体がない”(杉本・庄司, 2006)とされているのだと考えられる。実際に、これ

までの研究においても、「居場所」の英訳には、そのまま“Ibasho”あるいは“Ibasyo”が充てられており、その後に補足的説明がなされているのが常である。更に、その補足的説明も、研究者間で統一されているとは言い難い。例えば上述の杉本・庄司(2006)は、“Ibasho (Existential Place)”としており、石本(2009)においては、“Ibasho (Psychological space we do not have rootless feeling)”とされている。また、“Ibasyo (one’s psychological space)”(則定, 2006)としているものや、“one’s own place”(花嶋, 2011)としているものもある。これらは各研究者の居場所についての定義の違いが反映されたものともとれるが、心理的側面が含まれた日本語の「居場所」という言葉を海外の言葉に翻訳することの困難さを示しているとも考えられる。

こうした「居場所」の概念が、海外にはなく、日本に独特のものであるとすれば、その概念化の過程には、何らかの日本の文化的要因が寄与している可能性が考えられる。本研究では、その点について検討することを目的とする。

2. 「居場所」の定義と日常語としての「居場所」

前項でも触れたように、「居場所」の概念的な定義は未だ確立しているとは言い難い。例えば村瀬ら(2000)は、居場所を“心の拠り所となる物理的空間や対人関係、もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー”と定義している。廣井(2000)は「居場所がある」という事態について“自分自身であることが受け入れられていると感じられること”としている。則定(2008)は「居場所」の特に心理的側面を強調する意味で、「心理的居場所」という表現を用い、“心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場”と定義し、心理的居場所があるという感覚を心理的居場所感としている。他方、花嶋(2011, 2013)にみられるように、「居場所」という言葉で、ひきこもりの支援をする中間施設を指している場合もある。

こうした居場所の定義には一定の共通性がみられるものの、統一した定義は確立されていない。このような定義の確立の困難の要因としては、居場所が元来、日本語の日常語であることが考えられる。学術の領域を離れた、日常の生活の中で用いられる言葉であるがゆえに、それが使用される文脈は多岐に渡り、そのときどきの文脈ごとにその意味も異なりうる。日常語としての「居場所」は多義的であると言える。日常語と学術的専門用語の関係について、土居(1994)は“日常語は初めに定義されて使われるものではなく、使われている中におのずとその意味がわかるものである。これに反して専門語は定義されて初めて使われる。次に、日常語はそれが使われるコンテキスト如何によって少しずつ意味が変化する。…(略)…これに反して専門語はその定義の中にコンテキストが組み込まれていて、その意味もコンテキストも原則として変わらない”と述べている。すなわち、「居場所」について、専門語として学術的に定義したとしても、日常における「居場所」という語の使用には、常にその定義を超えて使用される可能性が存在している。もちろん、日常語としての「居場所」と学術的に定義された「居場所」の概念に交流が生じないわけではない。学術的になされた「居場所」の定義が、日常における居場所という語の使用に影響することも考えられる。しかし、「居場所」の語が、まず日常語として先にあった以上、そして、言葉の意味が通時的に変化しうる以上、日常語での「居場所」の語の使用と、学術的な領域での「居場所」の定義が乖離する可能性が常に存在している。そして、この「居場所」という語

が、不登校やひきこもりの支援という実践的な文脈から生じてきている(中島ら, 2007; 石本, 2009)ことや、心理臨床実践において、クライアントが「居場所がない」という日常語でもって自らの苦痛を訴える事実を考慮すれば、日常で使用される意味について考慮しておく必要がある。この点が居場所の定義を困難にしている一因だと考えられる。

土居(1971)が“国語はその国の魂に内在するすべてを含んでおり、それゆえにそれぞれの国にとって最上の投影法なのである”と述べているように、日常語にはその言語を使用する共同体の文化や心性が反映されている。もとは日常語であった「居場所」という概念が、前述したように海外においては類似の概念がみられないものであるのならば、そこにも何らかの日本の文化的心性が反映されていると考えられる。本研究は、特に「居場所」が心理的意味を含むようになった経緯について、いかなる日本の文化的心性の影響があったのかについて仮説的に検討することを目的とする。

3. 日本の文化的心性

それでは、日本の文化的心性とは、一体いかなるものなのだろうか。この点について検討するとき、日本文化に特有とされている精神的現象を手掛かりにすることには意義があると考えられる。そこで、以下では対人恐怖症および「甘え」の概念を手掛かりに、日本人の文化的心性について考察する。

対人恐怖あるいは対人恐怖症とは、“他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではないかと、他人に不快な感じを与えるのではないかと、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一種”(笠原, 1985)である。対人恐怖症は、西洋に比べ、日本において多いとされており、木村(2005)は“この症状が日本人に多いということのうちに、日本人一般の公共性との関わりかたの特徴が反映されている”と述べている。

対人恐怖症の特徴として、症状に状況依存性があることが挙げられる(例えば木村; 2005, 河合, 2013)。対人恐怖症者は、気心の知れた身内と居るとき、あるいは、まったく見知らぬ人と同じ空間に居るときには、その症状が出現しないが、それらの中間にあたるような、中途半端な顔見知りの人と一緒に居る際に、もっとも強く症状が発現するのである。この症状の状況依存性について、木村(2005)は、以下のように述べている。

患者は気楽な身内のなかで、自己の個人的で単数一人称的・私的な内面を相手との複数一人称的に拡大された私的な内面のなかへと、ほぼ完全に埋没させて過ごすことができる。またもう一方の見ず知らずの他者たちのあいだでは、患者は彼らと無関係に、もっぱら自己の私的な内面のみを生きることができる。…(略)…これに対して、症状の出現しやすい中途半端な顔見知りに囲まれた状況では、患者はつねに、自己自身を私的・一人称的内面として規定すべきか、それとも公共的・三人称的個別として規定すべきかの二者択一を迫られる。

すなわち、家族などのごく親しい間柄や、「われわれ」と呼称することが可能となるような、複数一人称的な関係の間柄における〈私〉と、いわゆる公共的な場における〈私〉のいずれの〈私〉

としてあるべきなのかといった相剋が、中間的な顔見知りという対人状況で最も強くなり、対人恐怖の症状が発現するのである。こうした対人恐怖症が西洋に比べ日本人に多い理由について、木村（2005）は、日本人の複数一人称集団の形成しやすさを挙げている。“日本人では、私的な「私」がすでに複数一人称的な身内意識によって根底から浸食され、この身内意識そのものが…（略）…絶えずゆれ動いているので、個の主体性に裏打ちされた単独者としての「私」の意識も、各自の「私」のあいだで取り結ばれる公共的な間主観性／間主体性も、十分に発展しなかった”（木村, 2005）と述べている。

一方、河合（2013）は、“対人恐怖も、日本人が自己意識をもちはじめたために生じてきたと考えることができよう”としつつ、“対人恐怖では、共同体との関係が問題になるのではないかと思われる”とし、対人恐怖について、近代的意識あるいは近代的主体の確立と共同体の観点から考察している。対人恐怖症の症状について、河合（2013）は以下のように述べている。

共同体的なものは自分を守ってくれて、包んでくれるはずのもので、そこに浸っていて、安心できるはずのところである。しかし共同体から出ていこう、自立しよう、主体を確立しようという人には、共同体的なものが、自分を取り込んでしまい、脅かす脅威に感じられるわけで、だから中間の関係にある人たちが怖くなる。つまり共同体的な関わりというか、周囲からの温かいまなざしというのが、自立しようとか主体的に生きようと思っている人には、まともにつきように思えていやになる。…（略）…場依存的なところから脱却しようと、共同体から出ていこうという動きが生まれてくると、共同体との間でアンビバレンスや葛藤を体験することになる。

このように、河合（2013）は、日本人が近代的な自己意識を持ち始め、共同体から距離をとろうとする際に生じてくる葛藤から対人恐怖の症状を説明している。木村（2005）においては、一人称的・私的な〈私〉と三人称的・公共的な〈私〉の間の相剋という点が強調されているのに対し、河合（2013）においては、日本人が近代意識を確立しようという動きが現れてきたことという歴史的な変化に力点が置かれているという違いはある。しかし、“自分を守ってくれて、包んでくれるはずのもので、底に浸って安心できるはずのところ”（河合, 2013）という共同体的なものは、木村が述べる、身内とも呼べるような、複数一人称の関係性と重なりと考えられる。こうした共同体的なものから出立することで近代的な自己意識を確立するのか、あるいは共同体的な関係性における複数一人称的な〈私〉と三人称的・公共的な〈私〉の両義性をいかに生きるのかという違いはあるにせよ、日本文化においてはこうした共同体への埋没的・依存的な経験が、〈私〉の形成の上で重要となり、共同体への埋没するような関係性のあり方と、個としての〈私〉をいかに生きるのかが重要となると言えよう。日本語における具体的な自己意識を表現する「自分」という語について、北山（2006）が“自分を「自らの分」と分解して読むと、環境や集団のなかで自分の有無が問われるという事情が明瞭に浮かび上がる”と述べていることも、こうした事態について述べているものと考えられる。

上述した共同体的な関係性と個としての〈私〉の関係における文化的要因について、河合（1976）は「場の倫理」と「個の倫理」という観点から考察している。河合（1976）によれば、「場の倫

理」とは“母性原理に基づく倫理観であり、与えられた「場」の平衡状態の維持に最も高い倫理性を与える”ものである。それに対し「個の倫理」とは、“父性原理”に基づくものであり、“個人の欲求の充足、個人の成長に高い価値を与えるもの”である。この「場」と「個」に関して、“日本人は場の中に個を完全に埋没させているわけではない。われわれは場の平衡状態を維持しながらも、自分の個を生かしてゆく方法を身につけている。…（略）…場の中に共存しつつ、なおかつ自分を生かしてゆくためには、「間」の感覚を身につけなくてはならない”とし、“場」の倫理に従えば、個人を際立たせることはきわめて危険であり、いかに能力があっても、うっかり行動すると場の外に出されてしまう。日本では「場」の外に出ることは死を意味する”と述べている。すなわち、「場」の内に居ながら「個」としても生きるあり方を日本人は身に付けているのである。複数一人称的な集団や、共同体的な関係のなかで「場の倫理」に基づいた対人関係が結ばれながらも、同時に個としての〈私〉としても生きようがあるが、日本人の元来の自己意識のありようとも考えられる。このように「場」と表現されるような、他者との関係において自己を確立する日本人の自己観について、北山・唐澤（1995）は“相互協調的自己観”とし、欧米の“相互独立的自己観”との対比において考察している。また内田（2013）は“日本文化は関係思考、相互協調性からなる自己意識と、「思いやり」や「察し」が求められる人間関係の仕組みを作り上げてきた”と述べている。

他方、上記のような複数一人称的な集団や共同体的なものは、日本においてはしばしば「身内」あるいは「ウチ」として表現され、「ソト」「他人」と対比的に語られる。こうした「身内」あるいは「ウチ」について、土居（1971）は、身内の人間については無遠慮に振る舞うことを挙げ、“身内に無遠慮なのは甘えのためである”と述べている。「甘え」は土居が提唱した日本語独自の概念であり、“日本語の甘えという言葉に由来するこの概念は、「依存」と「愛着」という概念上異なる二つの状態のブリッジの役目を果たしている”。すなわち、主体の対象に対する依存と愛着を表現する概念である。身内と甘えの関係について、斎藤（2003）は、「甘え」にもとづく対象関係が、「他人—身内」の区分につながることを指摘し、“他人—身内の対比は「甘えてよい関係か否か」という点で一線が引かれている”可能性について述べている。個人にとっての身内と他人、あるいはウチとソトを区分する情緒的な指標として、「甘え」があるのである。そして、“日本人は、個人が社会的同一性を獲得する際、その所属する場に依存します。すなわち自分の属する職場、学校などを「ウチの」と呼び…（略）…身内意識がおよぶ「場」という枠組みによって、「ウチ」と「ソト」が決まる”としている。日本人が社会的同一性を獲得する際、「ウチ」と呼べる場に所属することが重要であり、その「ウチ」と呼べる場は「甘え」にもとづいた関係をもつことができる場であると言える。

日本文化においては、〈私〉の形成・確立において、共同体あるいは、ウチ・身内と表現することが可能な、複数一人称の関係性が重要であり、その関係性の中で個としてもいかに生きるかが重要となる。こうした関係性は「場の倫理」に基づいた対人関係であり、そのようなウチと呼ばれる関係性に特徴的な情緒として「甘え」が考えられるのである。

中村（1999）は、「ウチ」や「ソト」と「居場所」の関係について、“居場所の感覚が安定するためには、「ウチ—中間領域—ソト」という空間構造と、「自分—なじみのある他者—なじみのない他者」という対人構造とが、それぞれ対応していることが重要”であり、“ソトと明確に区別

されてウチ化された中間領域は「居場所がある」として感じられる”と述べている。すなわち、ウチとソトといった文化的な関係性と「居場所」概念との間に関連があることが示されている。それでは、上述した文化的心性と、「居場所」の概念の今日的な意味の形成過程とは、いかなる関係があるのだろうか。

4. 日本人の文化的心性と「居場所」概念の関連について

「居場所」が心理的側面を含んで概念化されてきた経緯に、不登校児童に対する対策があった（住田, 2003 ; 中島ら, 2007 ; 石本, 2009）。住田（2003）によれば、学校に行くことができなくなった子どもたちが、安心して居心地良く居られるような場所を設けようとする動きが不登校の子どもをもつ親の間で生じ、実際に設立されたフリースクールが「居場所」の原型となった。不登校とは、様々な心理的要因の一つの帰結として学校に行かなくなるという状態像を指すが、これは、学校という「場」の喪失であり、当該の子どもにとって、学校が「ウチ」と呼べるような共同体的・複数一人称的な「場」でなくなることを意味すると考えられる。一般的に、児童・生徒にとって、学校は、家庭に次いで、所属する中心的な「場」であると言えるが、そうした場を喪失することは、これまでの議論からすれば、〈私〉という意識の確立にとって大きな危機であると言える。河合（1976）は、“日本では「場」の外に出ることは死を意味する”と述べているが、これは、場に所属することなしでは、自己を十分に確立することができない意味に解される。土居（1971）は、“人間は何ものかに所属するという経験を持たない限り、人間らしく存在することができない”としている。これらを考慮すれば、不登校とは単に学校に行かなくなるのではなく、一つの共同体であり「場」から離脱する、あるいは所属する「場」を喪失することであり、〈私〉という自己意識が存在することの危機となる。

この点において、例えばアメリカにおいては、不登校はむしろ子どもの教育を受ける権利が脅かされる事態として捉えられ、迅速に登校を開始させることを大人あるいは社会の義務だと考える（齊藤ら, 2009）。すなわち、「場」の喪失ではなく、教育を受ける機会の喪失として捉えられるのである。ドイツにおいてもそうした傾向があり、不登校になった子どもが、教育を受けるために再び学校に戻るようになったり、あるいは、社会的教育者と呼ばれる専門家が、家庭において子どもを教育したりする（渡邊・石田, 2005）¹。不登校という事態に関するこうした捉え方の違いには、これまで議論してきた日本の文化的心性が関係していると考えられるのではないだろうか。つまり、日本の不登校においては、こうした教育を受ける機会がなくなってしまうことももちろん重大なことであったが、それ以上に、所属する「場」、それも学校という社会的な「場」を喪失することが、子どもが自己を確立していく上で、深刻な危機的事態として捉えられたのではないだろうか。このような中で、フリースクールといった子どもが居られる「場」、すなわち「居場所」の重要性が唱えられたのは必然的であるようにも思われる。

日本文化に生きる個人にとって、〈私〉の形成に寄与する「場」は、「ウチ」と呼べるような「場」、すなわち、「甘え」に基づく情緒的關係を形成することができるような場であることが肝要とな

¹ただし渡邊・石田（2005）においては、ドイツにおける不登校への対策として「生活の学校」の取り組みも紹介されており、この「生活の学校」は、日本のフリースクールが持っている性格と重なる点があると考えられる。

る。土居（1971）は、“人間はかつて甘えるということを経験しなければ、自分を持つことができない”と述べている。甘えられるような関係の場であるには、そこに属する個人が安心できることが重要であることは言うまでもない。「居場所」という言葉が、「安心できるようなところ」であり、「自分らしくいられるところ」といった意味合いで用いられるようになった経緯には、こうした文化的経緯があるのではないだろうか。

5. まとめと今後の展望

本研究では、日本語の日常語でもある「居場所」という概念が、今日のように心理的次元の意味を含むようになった経緯について、日本人の文化的心性との関連について仮説的に検討した。西洋に比べ日本人に多いとされている対人恐怖症の症状の状況依存性についての検討を通じて、日本人において〈私〉という自己意識が成立する上で、複数一人称の間柄や共同体が重要な役割を果たすことを明らかにした。また、こうした複数一人称の間柄が、しばしば身内と表現され、「甘え」の成立する関係であることを確認した。こうした複数一人称の間柄や共同体は、河合（1976）の「場の倫理」の概念にみられるように、関係を「場」として捉える日本人の視点が関係していると考えられた。

「居場所」の概念が今日のような形で用いられるようになったことには、不登校の問題があるが、不登校は単に教育を受ける機会や権利の喪失ではなく、他ならぬ「場」の喪失であり、これは「場」における安心できる関係性を通して〈私〉を存立させる日本文化に生きる個人にとっては、まさに〈私〉の存在の危機であると捉えられた。こうした背景から、不登校の児童や生徒が安心して居られる場としてのフリースクールが重要視され、「安心でき」「自分らしくいられる」、すなわち〈私〉を存立させ、形成していく「居場所」という概念が形成されていった可能性が考えられた。

本研究の限界としては、「居場所」という概念について汲みつくして論じられたとは言い難い点がある。本論文における「居場所」は、関係性の存在する「場」という、いわば他者が存在する場としての「居場所」である。一方、日常語の文脈における「居場所」は、この意味に留まらない。例えば「居場所」には、一人で居るような居場所もあれば、インターネット空間が居場所とされる場合もある。本論文では、このような「居場所」を包含した検討については不十分であり、この点については今後の課題としたい。

また、本研究では「対人恐怖症」を手掛かりに検討を行ったが、対人恐怖症は、近年減少していることが指摘されており、その点について河合（2013）や岩宮（2013）は、共同体の力が弱くなってきていることを指摘している。こうした日本文化の現代的な変化の中で、「居場所」の概念自体も、その比重や、意味するところが変わっていく可能性があるが、この点についても、今後の課題としたい。

引用文献

土居健郎（1971）：「甘え」の構造 弘文堂

- 土居健郎 (1994) : 日常語の精神医学 医学書院
- 花嶋裕久 (2011) : ひきこもりの若者の居場所と就労に関する研究 居場所から社会に出るまでのプロセス 心理臨床学研究, 29, 5, 610-621
- 花嶋裕久 (2013) : ひきこもりの若者が就労して居場所を離れるプロセス 心理臨床学研究, 31, 4, 529-540
- 廣井いづみ (2000) : 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究 18, 2, 129-138
- 石本雄真 (2009) : 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), 93-100
- 岩宮恵子 (2013) : 臨床現場から見る「ひきこもり」(河合俊雄・内田由紀子 編 (2013) : 「ひきこもり」考 創元社)
- 笠原嘉 (1993) : 対人恐怖 (加藤正明ら編 (1993) : 新版精神医学事典 弘文堂)
- 河合隼雄 (1976) : 母性社会日本の病理 中央公論社
- 河合俊雄 (2013) : 日本における若者の病理の変化——ひきこもりと行動化 (河合俊雄・内田由紀子 編 (2013) : 「ひきこもり」考 創元社)
- 木村敏 (2005) : 関係としての自己 みすず書房
- 北山修 (2006) : 自分がない (妙木浩之編 (2006) : 日常臨床語事典 誠信書房)
- 北山忍・唐澤真弓 (1995) : 自己 : 文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 2, 133-163
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文 (2000) : 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ 通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因 心理臨床学研究, 18, 3, 221-232
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美 (2007) : 「居場所」概念の検討 三重大学許幾学部研究紀要, 58, 77-97
- 中村泰子 (1999) : 「居場所がある」と「居場所がない」との比較—○△□法の基礎研究として— 児童・家族相談所紀要, 16, 13-22
- 則定百合子 (2006) : 思春期における「こころの居場所」に関する研究 神戸大学発達科学部研究紀要, 13(2), 105-115
- 則定百合子 (2008) : 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41, 64-72
- 斎藤環 (2003) : ひきこもり文化論 紀伊国屋書店
- 齊藤卓弥・西松能子・南和行・大久保善朗 (2009) : アメリカにおける精神科と他の職種との連携—不登校へのチーム・アプローチの紹介— 臨床精神医学, 38, 9, 1287-1295
- 杉本希映・庄司一子 (2006) : 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54(3), 289-299
- 住田正樹 (2003) : 子どもたちの「居場所」と対人的世界 (住田正樹・南博文編 (2003) : 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会)
- 内田由紀子 (2013) : ひきこもりと日本社会のこころ (河合俊雄・内田由紀子 編 (2013) : 「ひきこもり」考 創元社)
- 渡邊隆信・石田千織 (2005) : ドイツにおける不登校への対応——「生活の学校」を中心に 兵

中藤：「居場所」概念と日本文化の関連について

庫教育大学研究紀要, 27, 1-14

(臨床心理実践学講座)

(受稿 2014 年 9 月 1 日、受理 2014 年 11 月 20 日)

「居場所」概念と日本文化の関連について

中藤 信哉

本研究では、「居場所」概念と日本文化の関連について検討した。西洋に比べ日本に多いとされている対人恐怖症の症状の状況依存性や、「甘え」の概念についての検討を通じて、日本人において〈私〉という自己意識が成立する上で、複数一人称の関係性や共同体が重要な役割を果たすことを明らかにした。こうした関係性はしばしば身内と表現され、「甘え」の成立する関係であることを確認した。こうした複数一人称の間柄や共同体は、「場の倫理」の概念にみられるように「場」として捉えられた。不登校とは「場」の喪失という事態であり、〈私〉の存在の危機であると捉えられた。こうした背景から、不登校の児童や生徒が安心して居られる「場」が重要視され、「安心でき」「自分らしくいられる」、すなわち〈私〉を存立させ、形成していく「居場所」という概念が成立していった可能性が考えられた。

Relationship between the concept of “Ibasho” and Japanese culture

NAKAFUJI Shinya

The present study was performed to examine the relationship between the concept of “*Ibasho*” and Japanese culture. Through consideration of the symptoms of anthropophobia and the concept of “*Amae*,” we found that for Japanese the group in which one can experience “we-feeling” or some collective is important to establish the sense of “I.” These relationships are called “relative” or “inner” in Japanese and the affection of “*Amae*” is a feature of them. In addition, in these relationships, people are related to each other in the ethics of “place.” Considering the history of the concept of “*Ibasho*,” the places where children not attending school can stay in safety have been called “*Ibasho*.” We regard school non-attendance as the loss of the place where one can be related to others in the mood of “*Amae*,” in which one can feel safe and establish the sense of “I.” For these Japanese cultural backgrounds, the concept of “*Ibasho*” has current psychological meaning. Future research topics are presented.

キーワード：「居場所」概念、日本文化、〈私〉

Keywords: The concept of “*Ibasho*”, Japanese culture, “I”